

カンボジア子どもの家

～ 活動紹介 および 案内 ～

<カンボジア子どもの家>

住所 P. O. BOX 2166, Phnom Penh 3,
PHNOM PENH, CAMBODIA
TEL カンボジア (855) - 72 - 971530
日本 040 - 207 - 6613

はじめに

カンボジアは長い内戦のあと、ようやく立ち上がろうとしています。1993年に国連の援助により実施された選挙は、カンボジアに平和をもたらしたかのように見えました。ところが、1997年7月に起きた内乱により、再び政情不安に陥りました。

しかし、ほとんどの国民は戦争に疲れ、心から平和を望んでいるのです。

今年の7月26日には、新たな選挙が行なわれました。が、国民の多くは字が読めず、それぞれの政党の政策も、候補者の主張もわからず、何党に、誰に、投票すればよいのかさえ、知ることもままならないのです。

いま、私たちにできることは、識字率を上げ、教育に力を注ぎ、カンボジアの人々が自分たちの手で文化を守り、築きあげて行くことのお手伝いをすることです。

《カンボジア社会の現状》

いま、カンボジアでは農村部には地雷があり耕作ができず、都市部では失業者があふれ毎晩のように銃声が響きます。生活不安のなかで犯罪が多発しています。現金収入の道はなく家族に病人ができれば、そのまま死を待つか、子どもを人買いに売るしか選択がないほどです。国際的な援助が必要となっています。

〈子どもたちの現状〉

『カンボジア子どもの家』では、「今、何が必要なのか」、「今、何をすべきか」を考え、一千人の子どもたちから聞き取り調査を行なってきました。その中で教育の大切さを痛感しました。カンボジアの子どもたちは、長い内戦のため教育を受けることができません。貧しさゆえの家庭崩壊にさらされています。家族のない孤児たちが、多く産み出されているのです。そんな孤児たちが、首都プノンペンではストリートチルドレンとなり、雨露を凌ぐ家もなく、路上で生活しています。生活手段を持たない子どもたちは、盗みや物乞いで、糧を得ていると言います。ローティーンの子どもが、暗がりでも客の手を引き、買春される姿は痛々しく、「今、私たちに何ができるか」と、強烈に訴えかけてくるのです。

〈教育の現状〉

“子どもたちは、勉強したくても学校がない。学校があっても先生がいない”これがカンボジアの教育現場の現状です。先生がいても、公務員の給料が安く（一ヵ月15\$）、副業に励む先生が多いのです。カンボジアの東北部クラッチェ県のある村では、二百人の生徒に、三人の教師だけでした。この現状だけでも無理があります。そのうえ、毎日授業を行なう先生は一人だけでした。多くの生徒を一度に教えることは難しく、朝、昼、夕と三部授業を行い、一～六年生までを同じ教室で教えているのです。

カンボジアでは古くから寺子屋が営まれ、村ではお寺の僧侶が教育の一翼を担っていました。しかし、ポルポト政権下では信仰が認められず、僧侶は弾圧されました。信仰の指導者を失うだけでなく、村の教育者も同時に失ったのです。

大学などの教職課程を卒業した生徒は、教職に就かず外資系の企業や先進国のNGOなどの団体に就職していきます。公務員の十倍の収入が見込めるからです。15\$の月給では家族を養うことはできません。

《活動主旨》

「カンボジアこどもの家」に携わる人々は、利益利潤を求めることなく、それぞれが持っている時間、金銭、能力をもちより、カンボジアの人々と協力しながら行動します。

カンボジアの将来を担う子どもたちにクメール語（カンボジア語）を学ぶ機会を提供し通学のチャンスを与えるためのお手伝いです。

《目的》

1. 就学援助 貧困、その他の理由により学校に行けない子どもたちを通学できるように援助する。文房具、学用品、教科書、制服、そのほか就学に必要な物資も提供します。
2. 孤児の援助 カンボジアの子どもたちは戦禍で両親をなくし、貧しさ故に家庭崩壊の浮き目に曝され、多くの孤児が作られています。彼らに「家庭」の暖かさを知ってもらうため、カンボジアの人々に里親になっていただき、孤児たちが家庭生活を受け、通学できるように援助します。
3. 識字率の向上 クメール語（カンボジア語）のポスター、カルタ、絵本、紙芝居を通して、文字に接する機会を与えます。ユニセフによれば、カンボジアの識字率は65%と発表されているが、我々の実地調査によれば、10%に満たない地域も残されています。
4. 生活援助 病気や感染症で苦しむ子どもたちに医薬品を提供します。お金がなく服も買えない子どもたちに衣服や日用品を必要に応じて提供します。

「カンボジアこどもの家」代表 栗本英世 略歴

'51年滋賀県生まれ。十代の頃より福祉に興味を持ち、従事する。台湾の輔仁大学で学んだのち、視点は日本だけに留まらず、アジアへと拡がっていった。台湾、香港、中国、タイ、ラオスと活動を続け、'96年よりカンボジアに向かう。現在、カンボジア東北部クラッチェに在住して、孤児や貧しい子どもたちの教育援助を続けている。

「浅井寿樹チャリティー写真展 ～カンボジアの子どもたち」

日時 1998年12月1日～13日。(8:00～20:00) / 入場無料

場所 東京YMCA国際奉仕センター1Fホール
住所 東京都千代田区神田見土代町7
TEL 03-3293-7011 担当者 真野
FAX 03-3293-9474

「スライド・トーク」 12月1日 18:00～20:00 (詳細は上記、担当者まで)

共催 カンボジア子どもの家
東京YMCA
後援 JCBL (地雷廃絶日本キャンペーン)
IKTT (クメール伝統織物研究所)
HAB21 (イルカ研究会・カンボジアの川イルカを守る会)
MIUN (毎日国際ボランティア)
協力 富士写真フイルム株式会社
株式会社 日本発色

・上記の写真展を、「カンボジア子どもの家」の活動と、カンボジアの子どもたちの現状を知ってもらうために、開催いたします。よろしくお願ひします。

浅井 寿樹 (あさいとしき) '71年、愛知県生まれ。大阪芸術大学写真学科卒。
学生時代から、子どもや女性、労働者などの社会的弱者の視点を大切に、それを
主眼に置く取材を続けてきた。現在、「買春」「エイズ」「児童労働」を主なテーマ
として、活動している。

今までに、「アエラ」「フライデー」「ヤングジャンプ」「フラッシュ」「プレイ
ボーイ」「週刊朝日」等の週刊誌・雑誌でフォトルポを発表している。